

遠隔教育における学習支援

——日中放送大学へのアンケート調査（2010年）より——

胡 逢 蘭

1. 調査概要

1-1 調査目的

近年、インターネットなど情報通信技術により、e-learningなどの学習形式がいろんな形で取り入れられて、人々に空間的、時間的な束縛なく学習チャンスが提供できるようになってきた。これらの学習スタイルは、学習者と教師は基本的に離れていて、学習者が中心となって勉強しているので、学習者の主体性が高く要求されている。本稿では、学習者の主体性を、教育機関が提供している職員・教師からの支援と指導と、学習資料・学習情報の提供などの学習支援の下で、自ら学習計画を立て、それにより自主的に学習活動に取り組んで学習を進めていくこと、と定義する。

このような学習スタイルは今までの学習経験と違う。学習者がこれまでに体験した学習スタイルは学校教育などで学習者が学習の場に集まって、教師と直接会って、他の学習者と一緒に勉強することであった。遠隔学習という学習スタイルは面接授業以外、ほとんどの場合、教師や他の学習者と会えない。一人で不安や孤独感を感じる成人学習者は少なくないと思われる。

成人学習者の通信技術使用への熟成度や主体性の高低や教師と他の学習者とのコミュニケーション能力の高低、また、心理・感情の状態などの諸要因が、遠隔学習が効率的、順調に進むことに大きな影響を及ぼすと考えられる。それらは学習者自身のことと教育機関が提供する学習支援にも関わっている。

アンケートでは、遠隔学習を選んだ学習者は自主的学習をどのように認識しているか、学習への取り組みなどをどのようにしているのか、教育機関が提供している学習支援が役割を果たしているのかなどについて、日本の放送大学と中国の電視大学の学生に調査した。

1-2 調査項目

基本属性（性別、年齢、職業など）の他に、学習者自身の主体性への認識、自主的学習への取り組み、教師と他の学習者とのやり取り、学習支援への満足度、そして、学習条件と環境、学習動機などについて、調査項目を作成した。

1-3 調査方法

集合調査法により日本では放送大学大阪学習センターの面接授業を受講する成人学習者354人を対象として、アンケート用紙を配分し、236人の回答を回収した。回収率は66.6%である。中国では、吉林省の電視大学の試験期間中に、300部のアンケート用紙を配分し、294部を回収した。27部が無効となるため、有効回答率は89%である。

2. 調査結果と分析

2-1 学習者自身の主体性への認識について

放送大学での学習には、自主的学習が必要・重要だと思うかという質問に対して、とても必要・重要と必要・重要と回答を合わせて、日本側は215人、中国側は209人である。両方の学習者は自主学習を高く認識しているが、残りの少し、あまり、まったく必要・重要だと思わない等の消極的な回答は合わせて、日本側の21人に対して、中国の方は58人、調査全体の一、二割を占める（図1）。

自主学習が必要と高く認識している学習者は自主的・積極的に学習を進めているかという質問に対して、とてもそう思う、思う回答を合わせて、日本側は128人が、中国側は147人が、自分が自主的・積極的に学習を進めていると回答した。それぞれ自主的に学習に取り組むと思う学習者は調査全体の54%と55%を占める（図2）。

次に、学習動機について。日本側では「技能・知識

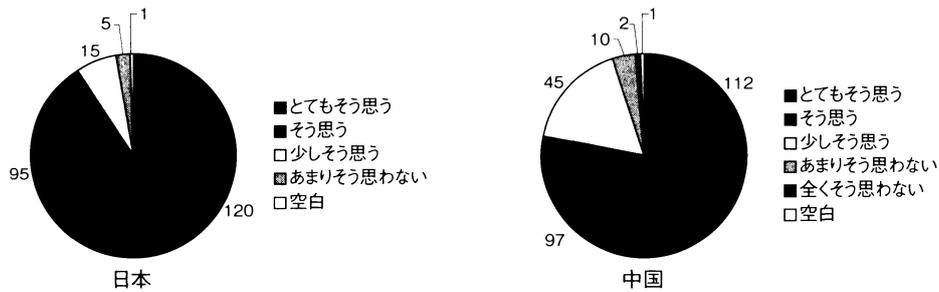


図1 自主的学習への認識

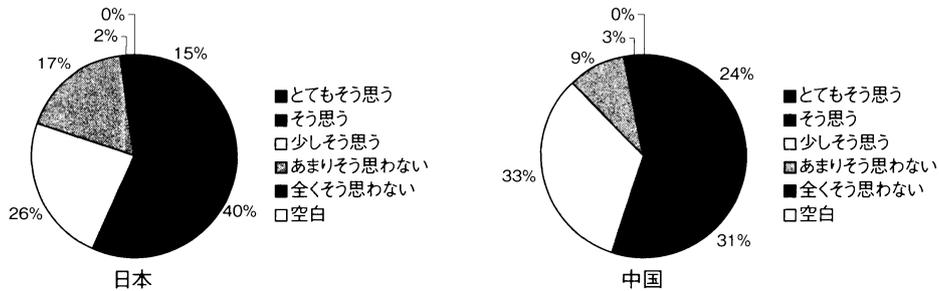


図2 自主的・積極的学習

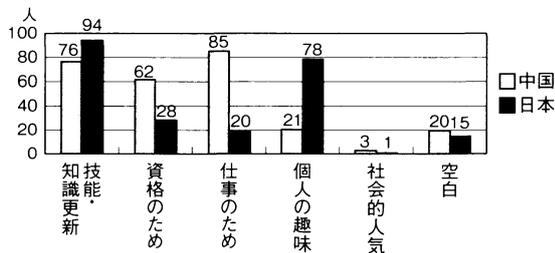


図3 学習動機

更新」, 「個人の趣味」, 「資格のため」, 「仕事のため」などを, それぞれ 94 人, 78 人, 28 人, 20 人が回答した。中国側は「仕事のため」, 「技能・知識の更新」, 「資格のため」, 「個人の趣味」の順で, それぞれ 85 人, 76 人, 62 人, 21 人が回答した (図3)。日本の学習者は自己開発や自己実現のため放送大学を選んでいて, 生涯教育の一環として放送大学が役割を果たしていると考えられる。中国のテレビ大学は, 生涯教育を普及することが重要な役割として期待されているが, 社会経済発展の実現には, まだまだ沢山の人が高等教育を受けるチャンスを与える必要があるので, 学歴を取得する教育の実施はテレビ大学のひとつ重要な役割として当分続けていくことが求められていると言えよう。

2-2 自主的学習への取り組みについて

また, どのように自分の学習計画を作ったかという質問について, 日本側は 212 人が自分で作ったと回答した。それに対して中国側は, 自分で作ったと答えた

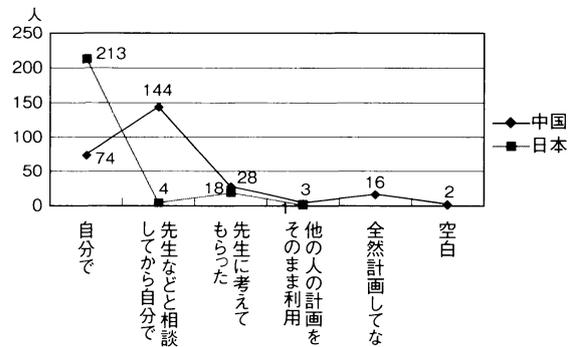


図4 学習計画の作成

のは 74 人で, 教師と一緒に学習する人と相談してから自分で作ったと回答したのは 144 人であった。日本の学習者より, 中国の学習者は順調に学習を進めるため, 教師や周囲の人の手助けが必要であり, 自立性がまだ不足であると考えられる。一方, 学習の初めの段階で協力学習が生まれることがわかった (図4)。

学習に関して何か分からない時, どうするかという質問に対して, 日本側は 126 人, 調査全体の 53% の学習者はネットで調べると回答し, 21 人がすぐ放送大学の教師・学生に相談, 32 人がそのまま置いとくと回答した。一方中国側は, まずネットで調べその後テレビ大学の教師・学生に相談すると回答したのが 184 人であり, ネットで調べると回答したのは 43 人, すぐテレビ大学の教師・学生に相談と回答したのは 16 人, そのまま置いとくのは 20 人であった。この結果からみれば, 中国の学習者は自分で問題を解決しよう

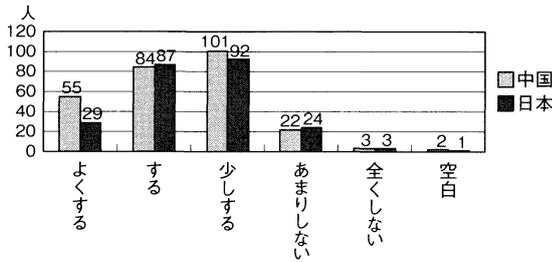


図5 学習活動についての反省・自己評価

と努力しているが、その解決過程やそれにより自分が考えた結果について一緒に勉強している学習者や教師と話し合いをすることによって、自分の解決方法やその結果が正確であるかどうかの確認作業をしていると言えよう。つまり、このような協力学習により、新しい知識が構築できるし、学習への主体的姿勢も生まれると考えられる。

自分の学習活動に対して反省・自己評価するかという質問に対して、中国側回答の順番は、101人が少しする、84人がする、55人がよくするとなり、日本側は、92人が少しする、87人がする、29人がよくすると回答した。日中両方とも同じ順番となっていることが分かった(図5)。反省・自己評価できていない理由について、中国側は、適当な練習問題がないので学習効果が測れないと回答した学習者は8人、他の学習者の状況が分からない、全面的な評価が難しいと回答したのは10人であり、それに比べて、日本側はその意識がないのは11人、他の学習者の状況が分からない、全面的な評価が難しいと回答したのは8人となった。両国の結果を見れば、反省・自己評価という学習行為の役割に対する認識がまだ高くないし、他の学習者との情報交換などが少ない等々の理由で、反省・自己評価に積極的に取り組んでないと考えられる。

2-3 他人とのコミュニケーションについて

遠隔学習において、学習者中心に学習を進めていくことが重要だが、教師や職員と他の学習者とのコミュニケーションが学習を進めるうえで欠かせない重要な要素である。今回の調査では、学習者と教師とのやり取りを見ることにした。

教師との連絡は容易につくかという質問について。日本側の回答を見ると、とても容易、容易、少し容易と回答した学習者は合わせて33人に対して、あまり容易ではないと回答したのは79人、まったく容易ではないと回答したのは72人、空白の人は52人となった。空白というの多くは教師と連絡を取ったことがな

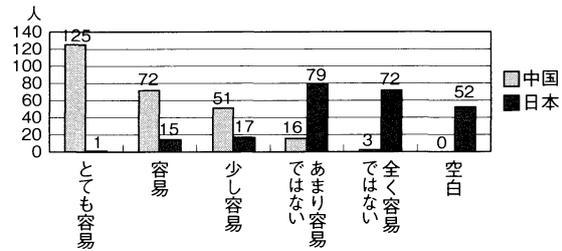


図6 教師との連絡

いということである。一方中国側の回答では、教師との連絡は容易につくかという質問について、とても容易、容易、少し容易それぞれ125人、72人、51人であった(図6)。

教師からの回答がいつもらえるか質問について。日本側は32人が当日もらえると回答し、1日~3日でももらえるのは14人、空白は157人であった。当日というのは面接授業の時、質問したら当日に教師から回答がもらえるということである。何について相談するかという質問について、全くしないという回答は139人であり、それに対して、学習内容について相談すると回答したのは30人、履修関連について相談すると回答したのは26人となった。中国側は、いつ回答がもらえるかという質問について、当日と回答したのは136人で、1日~3日だと回答したのは95人であった。何について相談するのかという質問について、学習内容についてと学習方法についてと回答したのはそれぞれ83人と87人であった。

教師とのやり取りから見ると、日中の違いは一目了然である。中国側は、学習者は教師との連絡がとりやすく、何か問題があった場合教師からの支援を求めることが容易にできることが分かる。日本の場合には、教師への連絡はすべて学習センターの事務職員を通してとることとなる。それなら行き来に時間がかかることが分かる。それは学習センターは所長以外、教師たちはみんな専任ではないためであろう。

2-4 心理・感情

学習過程において、孤独感があると思うかという質問に対して、日本側はとても思う、思うと回答したのは合わせて59人、少し思うと回答したのは57人、あまり・全く思わないという回答と合わせて114人となった。孤独感あると孤独感ない回答者数はそれぞれ調査全体の49%と48%を占めることが分かった。一方中国側は、とても思う、思うと回答したのは合わせて95人、少し思うのは89人;あまり・全く思わないという回答合わせて80人となった。孤独感あると孤独

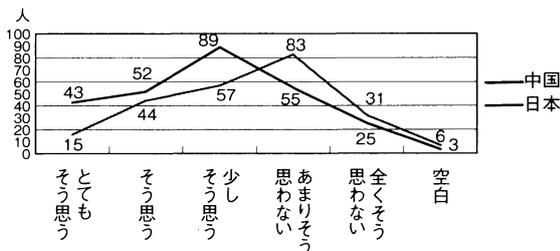


図7 孤独感

感ない回答者数はそれぞれ調査全体の69%と30%を占める(図7)。

自分の学習活動に対して、教師が関心を持ってくれていると感じるかという質問について、日本側ではとても感じる、感じると回答した学習者合わせて27人、少し感じると回答したのは27人、あまり・全く感じないと回答したのが135人となった。中国側は、とても感じる、感じると回答した学習者合わせて183人、少し感じると回答したのは63人、あまり・全く感じないと回答したのは19人となった。

以上の調査質問の回答からみれば、日本では学習者は教師が自分の学習活動に関心を持ってくれていると感じない学生が多いのは面接授業以外、学習者は教師と会う機会があまりないし、連絡を取るのも難しいためであると考えられる。中国の学習者は教師とよくコミュニケーションするにもかかわらず、孤独感がある人は69%いる。このことが学習者が途中で学習を続けられなくなる原因になりうると考えられる。

3. 調査結果についての考察

今回の調査から、遠隔教育において日中両国とも学習者に自主学習の意義・必要性について高く認識されている。しかし学習活動において、日中両国の相違点が明らかに現れている。

まず、日本の学習者は孤独感がないと思う人が中国の学習者より多い。中国の学習者は20代が中心となっている。一方日本の学習者は40代、50代、60代が多いのである。これらの学習者は生活や学習などいろんな人生経験を積んできているので自分の感情・心理状態を自己調節でき、自立性が高いと考えられる。一方中国の学習者は教師や周囲の人の手助けが必要であることが調査からわかった。そして、中国の学習者は教師との連絡が日本側より容易であり、教師からの

関心もあると感じられている。また、日中両国とも学習活動に対して学習者は反省・自己評価することには積極的に取り組んでいない。

以上のことより、日本側は、学習者と教師とのコミュニケーションがよく取れるようにする必要がある。事務職員を通して教師と連絡を取るだけでなく、電話やメールなど方法を提供して、何か問題があるときすぐ教師に連絡が取れるような措置を設けることが必要であろう。

また、反省・自己評価することにより、学習者は学習内容に対して自分がどこまで理解しているのか、何か不足しているのか、これから何を必要とするのか、何が分かってくるのか、これから何を必要とするのか、反省・自己評価しやすいように、日中両国の放送大学には練習問題や他の学習者との情報交換などの学習支援を提供する必要があると考えられる。

中国側は、学習過程において学習者の多くは孤独感を感じ、自主的学習を進めるため、教師や周囲の人の手助けが必要ということが調査でわかった。このことより、教師や職員などは学習者とのコミュニケーションが学習者にとっていかに必要なことなのかが推察できる。遠隔学習を選んだ学習者は主体的で自主的に学習ができると考えるが、主体性が不足している学習者を自主的・積極的に学習を進めるように、どのような学習支援を提供すればいいのかを明らかにすることが今後の課題である。

学習者の主体性を形成するため、学習者自身は主体性の意義を認識することが必要である。それ以外には、自主的に学習活動を取り組みながら、支援提供側である放送大学の教師や職員とのコミュニケーションあるいは、相互作用が必要となってくる。このことは、2009年放送大学が実施した卒業生アンケート調査にも気軽に教師とコミュニケーションできるシステムがほしいという学習者からの意見多いことから伺うことができる。そして学習者が自分の学習活動に反省・自己評価できる環境を整える必要がある。

参考資料

卒業生(1999.3~2009.3)アンケート調査報告書 大阪学習センター 2010年2月